国立東京療養所にて
殉教者ステパノ
――使徒行伝第７章――

（『愛泉』誌第31号、１９６０年5月20日発行）

１９５７年９月22日

小池辰雄

約束の神　具体的に救う神　現象の奥をつかめ　時間を支配する神　動的幕屋　無の教会　心の割礼　勝利の十字架

【使徒行伝7】

1 かくて大祭司いう『此等のこと果してかくの如きか』2 ステパノ言う『兄弟たち親たちよ、聴け、我らの先祖アブラハム未だカランに住まずして尚メソポタミヤに居りしとき、栄光の神あらわれて、3「なんじの土地、なんじの親族を離れて、我が示さんとする地に往け」と言い給えり。4 ここにカルデヤの地に出でてカランに住みたりしが、その父の死にしのち、神は彼を彼処より汝らの今住める此の地に移らしめ、5 此処にて足、蹈立つる程の地をも嗣業に与え給わざりき。然るに、その地を未だ子なかりし彼と彼の裔とに所有として与えんと約し給えり。6 神また其の裔は他の国に寄寓人となり、その国人は之を四百年のあいだ奴隷となして苦しめん事を告げ給えり。7 神いい給う「われは彼らを奴隷とする国人を審かん、然るのち彼等その国を出で、この処にて我に事えん」8 神また割礼の契約をアブラハムに与え給いたれば、イサクを生みて八日めに之に割礼を行えり。イサクはヤコブを、ヤコブは十二の先祖を生めり。9 先祖たちヨセフを嫉みてエジプトに売りしに、神は彼と偕に在して、10 凡ての患難より之を救い出し、エジプトの王パロの前にて寵愛を得させ、また智慧を与え給いたれば、パロ之を立ててエジプトと己が全家との宰となせり。11 時にエジプトとカナンの全地とに饑饉ありて大なる患難おこり、我らの先祖たち糧を求め得ざりしが、12 ヤコブ、エジプトに穀物あるを聞きて、先ず我らの先祖たちを遣す。13 二度めの時ヨセフその兄弟たちに知られ、ヨセフの氏族パロに明かになれり。14 ヨセフ言い遣して己が父ヤコブと凡ての親族と七十五人を招きたれば、15 ヤコブ、エジプトに下り、彼処にて己も我らの先祖たちも死にたり。16 彼等シケムに送られ、曾てアブラハムがシケムにてハモルの子等より銀をもて買い置きし墓に葬られたり。

17かくて神のアブラハムに語り給いし約束の時近づくに随いて、民はエジプトに蕃えひろがり、18ヨセフを知らぬ他の王、エジプトに起こるに及べり。19王は悪計をもて我らの同族にあたり、我らの先祖たちを苦しめて、其の嬰児の生存うる事なからんよう、之を棄つるに至らしめたり。20その頃モーセ生まれて甚うるわしくして三月のあいだ父の家に育てられ、21遂に棄てられしを、パロの娘ひき上げて己が子として育てたり。22かくてモーセはエジプト人の凡ての学術を教えられ、言と業とに能力あり。23年齢四十になりたる時、おのが兄弟たるイスラエルの子孫を顧みる心おこり、24一人の害わるるを見て之を護り、エジプト人を撃ちて、虐げらるる者の仇を復せり。25彼は己の手によりて神が救を与えんとし給うことを、兄弟たち悟りしならんと思いたるに、悟らざりき。26翌日かれらの相争うところに現れて和睦を勧めて言う「人々よ、汝らは兄弟なるに、何ぞ互に害うか」27隣りを害う者モーセを押退けて言う「誰が汝を立てて我らの司また審判人とせしぞ、28昨日エジプト人を殺したる如く、我をも殺さんとするか」29この言により、モーセ遁れてミデアンの地の寄寓人となり、彼処にて二人の子を儲けたり。30四十年を歴て後シナイ山の荒野にて、御使、柴の焔のなかに現れたれば、31モーセ之を見て視るところを怪しみ、認めんとして近づきしとき、主の声あり。曰く、32「我は汝の先祖たちの神、即ちアブラハム、イサク、ヤコブの神なり」モーセ戦慄き敢えて認むることを為ず。33主いい給う「なんじの足の鞋を脱げ、なんじの立つところは聖なる地なり。34我エジプトに居る我が民の苦難を見、その歎息をききて之を救わん為に降れり。いで我なんじをエジプトに遣さん」35斯く彼らが「誰が汝を立てて司また審判人とせしぞ」と言いて拒みし此のモーセを、神は柴のなかに現れたる御使の手により、司また救人として遣し給えり。36この人かれらを導き出し、エジプトの地にても、また紅海および四十年のあいだ荒野にても、不思議と徴とを行いたり。37イスラエルの子らに「神は汝らの兄弟の中より、我がごとき預言者を起こし給わん」と云いしは此のモーセなり。38彼はシナイ山にて語りし御使および我らの先祖たちと偕に荒野なる集会に在りて汝らに与えん為に生ける御言を授かりし人なり。39然るに我らの先祖たちは此の人に従うことを好まず、反って之を押退け、その心エジプトに還りて、40アロンに言う「我らに先だち往くべき神々を造れ、我らをエジプトの地より導き出しし、かのモーセの如何になりしかを知らざればなり」41その頃かれら犢を造り、その偶像に犠牲をささげて己が手の所作を喜べり。42爰に神は彼らを離れ、その天の軍勢に事うるに任せ給えり。これは預言者たちの書に「イスラエルの家よ、なんじら荒野にて四十年の間、

屠りし畜と犠牲とを我に献げしや。43汝らは拝せんとして造れる像、すなわちモロクの幕屋と神ロンパの星とを舁きたり。われ汝らをバビロンの彼方に移さん」と録されたるが如し。44我らの先祖たちは荒野にて証の幕屋を有てり、モーセに語り給いし者の、彼が見し式に循いて造れと命じ給いしままなり。45我らの先祖たちは之を承け継ぎ、先祖たちの前より神の逐いいだし給いし異邦人の領地を収めし時、ヨシユアとともに携え来りてダビデの日に及べり。46ダビデ神の前に恩恵を得て、ヤコブの神のために住処を設けんと求めたり。47而して、その家を建てたるはソロモンなりき。48されど至高者は手にて造れる所に住み給わず、即ち預言者の49「主のたまわく、天は我が座位、地は我が足台なり。汝等わが為に如何なる家をか建てん、わが休息のところは何処なるぞ。50わが手は凡て此等の物を造りしにあらずや」と云えるが如し。51項強くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆う、その先祖たちの如く汝らも然り。52汝らの先祖たちは預言者のうちの誰をか迫害せざりし。彼らは義人の来るを預じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を売り、かつ殺す者となれり。53なんじら、御使たちの伝えし律法を受けて、尚これを守らざりき』

54人々これらの言を聞きて、心いかりに満ち切歯しつつステパノに向かう。55ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、56『視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る』57ここに彼ら大声に叫びつつ、耳を掩い心を一つにして駆け寄り、58ステパノを町より逐いいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下に置けり。59かくて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』60また跪づきて大声に『主よ、この罪を彼らの負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠に就けり。

●約束の神

1かくて大祭司いう『此等のこと果してかくの如きか』

大祭司が「証言の通りか」と言ったときに、ここにステパノの大演説が始まるわけです。7章全体にわたってです。今、私たちがこのステパノの大演説を逐語的に追って、これを旧約聖書にあたって尋ねていったならば、一晩かかってもダメです。ここでは、重点を置いて読みたいと思います。一体、ステパノはどういうところに重点を置いているのか、一応読んでいきます。

2ステパノ言う『兄弟たち親たちよ、聴け、我らの先祖アブラハム未だカランに住まずして尚メソポタミヤに居りしとき、栄光の神あらわれて、3「な

んじの土地、なんじの親族を離れて、我が示さんとする地に往け」と言い給えり。4ここにカルデヤの地に出でてカランに住みたりしが、その父の死にしのち、神は彼を彼処より汝らの今住める此の地に移らしめ、5此処にて足、蹈立つる程の地をも嗣業に与え給わざりき。然るに、その地を未だ子なかりし彼と彼の裔とに所有として与えんと約し給えり。

ここは創世記の12章のところです。

「ここにエホバ、アブラハムに言い給いけるは、汝の国を出で汝の親族に別れ、汝の父の家を離れて、我が汝に示さんその地に至れ」（創世記12・1）

これが約束への第一歩です。ご承知の通りアブラハムは旅をして西へ西へと行きました。イスラエルの民は旅人、宿れる者で、イスラエルの歴史が一つの時間的、空間的な旅をしながら歩いている。私たちも人生は旅であると例えられている。しかも、私たちの人生はただ一個の人生ではない。日本の歴史の一端をうけたまわっている。それと同時にこの世界の歴史、否、じつに神の歴史の一端をうけたまわって、その一環をなして旅をしているわけです。この宇宙を完成なさろうとする神、神の国をきたらそうとなさる神さまの大目的、大聖意、摂理の下に私たちはあるわけです。その意味において非常に動的なのです。

「我は今日もまた次の日も進み行かざるをえず。我は父と共に働くなり」

と言うキリスト。ただじっと坐って瞑想している宗教ではない。そして、未だ子供のいないときから、

「私はこういう地をおまえにやるよ」

と約束をしてくださった。旅の神さまであると同時に、約束の神さまであられた。

「キリストが、救い主が来る」

という約束が旧約聖書です。この旧き約束は即ち、キリストが降臨した時に成就した。しかし、第二の新しき約束はキリストが再臨したときに、即ち

「新天新地」

がこの歴史の中に来るときに成就する。神さまの約束ですから、これは空約束ではない。イエス・キリスト自身が、

「われ再び来る」

と約束し、聖書もまた黙示録の一番終りで、

「われ来らん」

と宣言しています。その神の約束に対する信頼、これがアブラハムの信仰の内容です。

●具体的に救う神

6神また其の裔は他の国に寄寓人となり、その国人は之を四百年のあいだ奴隷となして苦しめん事を告げ給えり。7神いい給う「われは彼らを奴隷とす

る国人を審かん、然るのち彼等その国を出で、この処にて我に事えん」8神また割礼の契約をアブラハムに与え給いたれば、イサクを生みて八日めに之に割礼を行えり。イサクはヤコブを、ヤコブは十二の先祖を生めり。

この「割礼」とは神のために聖別せられた民としての徴です。キリストの者として聖別せられた「洗礼」と同じことです。創世記の17章あたりに出てくる。

9先祖たちヨセフを嫉みてエジプトに売りしに、神は彼と偕に在して、

このヨセフというのはある意味においてイエスの一つの先例、サンプルみたいなものです。創世記の37章以下に書いてある。

10凡ての患難より之を救い出し、エジプトの王パロの前にて寵愛を得させ、また智慧を与え給いたれば、パロ之を立ててエジプトと己が全家との宰となせり。11時にエジプトとカナンの全地とに饑饉ありて大なる患難おこり、我らの先祖たち糧を求め得ざりしが、12ヤコブ、エジプトに穀物あるを聞きて、先ず我らの先祖たちを遣す。13二度めの時ヨセフその兄弟たちに知られ、ヨセフの氏族パロに明かになれり。14ヨセフ言い遣して己が父ヤコブと凡ての親族と七十五人を招きたれば、15ヤコブ、エジプトに下り、彼処にて己も我らの先祖たちも死にたり。16彼等シケムに送られ、曾てアブラハムがシケムにてハモルの子等より銀をもて買い置きし墓に葬られたり。17かくて神のアブラハムに語り給いし約束の時近づくに随いて、民はエジプトに蕃えひろがり、18ヨセフを知らぬ他の王、エジプトに起こるに及べり。19王は悪計をもて我らの同族にあたり、我らの先祖たちを苦しめて、其の嬰児の生存うる事なからんよう、之を棄つるに至らしめたり。20その頃モーセ生れて甚うるわしくして三月のあいだ父の家に育てられ、21遂に棄てられしを、パロの娘ひき上げて己が子として育てたり。22かくてモーセはエジプト人の凡ての学術を教えられ、言と業とに能力あり。23年齢四十になりたる時、おのが兄弟たるイスラエルの子孫を顧みる心おこり、24一人の害わるるを見て之を護り、エジプト人を撃ちて、虐げらるる者の仇を復せり。25彼は己の手によりて神が救いを与えんとし給うことを、兄弟たち悟りしならんと思いたるに、悟らざりき。26翌日かれらの相争うところに現れて和睦を勧めて言う「人々よ、汝らは兄弟なるに、何ぞ互に害うか」27隣りを害う者モーセを押退けて言う「誰が汝を立てて我らの司また審判人とせしぞ、28昨日エジプト人を殺したる如く、我をも殺さんとするか」29この言により、モーセ遁れてミデアンの地の寄寓人となり、彼処にて二人の子を儲けたり。30四十年を歴て後シナイ山の荒野にて、御使、柴の焔のなかに現れたれば、31モーセ之を見て視るところを怪しみ、認めんとして近づきしとき、主の声あり。曰く、32「我は汝の先

祖たちの神、即ちアブラハム、イサク、ヤコブの神なり」モーセ戦慄き敢えて認むることを為ず。33主いい給う「なんじの足の鞋を脱げ、なんじの立つところは聖なる地なり。34我エジプトに居る我が民の苦難を見、その歎息をききて之を救わん為に降れり。いで我なんじをエジプトに遣さん」35斯く彼らが「誰が汝を立てて司また審判人とせしぞ」と言いて拒みし此のモーセを、神は柴のなかに現れたる御使の手により、司また救人として遣し給えり。36この人かれらを導き出し、エジプトの地にても、また紅海および四十年のあいだ荒野にても、不思議と徴とを行いたり。37イスラエルの子らに「神は汝らの兄弟の中より、我がごとき預言者を起こし給わん」と云いしは此のモーセなり。

このところでモーセのことが相当詳しく出ています。出エジプト記の3章のところです。

「これはわが汝をつかわせる証拠なり。我必ず汝と共にあるべし」（出エジプト3・12）

という、この素晴らしい人格的な「二つにして一つなる」関係、その如く具体的に、

「我は必ず汝と共にいるぞ」

というのが霊なのです。人格的な「神が共にいる」といいますが、しかし、相手は罪びとのモーセです。とうてい神と一緒にいられないのですが、そのときに、

「私はもう少し立派になってから貴神をお迎えしましょう」

ではない。あるがまま、そのままでいい。ただ大切なことは、ただ茫然としていることではない。あるがまま、そのままでいいが、ただ本当に平伏して神の前に自分を投ずる。これが本当の謙遜です。また敬虔という。敬虔とは信心の意味ですよ。そこで遠慮して後に引きさがることは本当の謙遜ではない。また、「ああそうか」と言ってなれなれしくしているのも、それもいかん。

「われ汝と共にあり」

と。一般の日本人はこんな神さまがいるなんて決して考えない。しかし、聖なる神が言うのです。モーセは神の前に平伏して、逃げていかないで、そのあるがまま、ドロのまま――泥靴はもちろん脱いだでしょうが、けれども自分という者は泥、罪なのです――そのままそこに平伏して、

「貴神がおっしゃるのなら」

といって、すべてを神にゆだねた。ここに聖なる神がその人を本当に聖なる者とする恵みの場が、その事態が起こる。

キリストは何のために降臨されたか。私たちの地界ではこれどうにもならない。ただ、はるかかなたに思い浮かべて拝んでいたって、どうにもならない。キリストは私たちの中に降り、馬槽の中に生まれ、同じパンを食べ、同じのどが渇き、という普通の人の子となって、

私たちの一切を思いやることができる。しかし、人間の同情とちがって、本当の神的な聖と、神的な愛と、神的な力と、神的な知恵とを持っておられる。聖書の宗教は私たちに具体的に臨んできて、具体的に救い上げるところの神さまの世界である。

「汝、神のことを瞑想せよ」

でもなければ、

「考えよ」

でもなければ、

「聖書の知識をためよ」

でもなければ、

「註解書を読め」

でもない。そういうような、私たちは観念ではない。皆さんも、観念の瞑想ではないですよ。具体的なものを救い上げるには具体的な道より他にない。その具体的なものは単なる瞑想の世界ではない。もちろん、私たちはある意味において瞑想ということを重んじはしますが、しかし、瞑想でただ悟入して悟るというような世界ではない。それは仏教の世界です。仏教もただ単に悟る世界ではないでしょう。神の呼びかけ、つかみかかりに対して具体的に自分を投じて行って体受する。これが聖書の宗教の世界です。

●現象の奥をつかめ

聖書にはいろいろと不思議なことがたくさん書いてある。創世記なんかをいきなり読むと、ヘビがエバを誘惑したりする。いったい、ヘビが語るなんて、

「そんなことは物語だ」

と言う。それは物語ですよ。

「禁断の木の実を食らう」

なんてことは物語です。するとすぐそれを捨ててしまうからダメなのです。物語を通して神さまは驚くべき現実を語っておられる。これが読めない。聖書は極端にいうと暗号ですよ。ですから、キリストは、

「聞く耳ある者は聞くべし」

と言う。キリストは暗号で語った。例え話にてキリストは、

「天国は一粒の芥子種のごとし」

と言われました。だから、具体的な生命の世界は具体的な表現よりか仕方がない。観念で言ったっていいですが、観念で言ったのではどうしてもはみ出してしまう。モーセは今この神にぶつかって、

「一体どういうことなのだろうか？」

と、いくら考えても分からない。神さまはモーセをとらえて、その現象面を通して現われ

たきた。火の炎をもって、また、声をもって現われてきた。神さまはこちらからは絶対に不可知ですよ、いくら尋ねたって。ですから、神の方から現われてきた。現象それ自身が神ではないですよ。それ自身は神の一つの現象面です。しかしながら、

「その現象面において本体がつかめるかどうか」

が問題なのです。現象それ自身を

「これは本当だろうか、ウソだろうか」

と考えて、本当だという結論が出てきたって、これでは始まらない。

「現象において、真に我々の感知すべからざるところの、本当の本体をつかまえるかどうか」

に信仰の秘訣がかかってくる。

花は、花において太陽の光熱を直観する人は、この花を見ている人です。

「花弁がいくつで、形や色がどうのこうの」

と表面だけを見ている人はこの花の本質を見ていない。

「これは花弁が足りない、だからこれは本ものではない」

とか、いろんなことをやる。そんなことをしていたのでは、生命をつかみそこなう。聖書の読み方は、あなた方の魂がすごい弾力をもって読まなければダメですよ。すると、聖書は私たちの魂にいよいよすごい無限の迫力を与えてくださる。

モーセは神さまに、

「われ汝と共にあり」

といってつかまえられたら、イスラエルの連中を率いて紅海を渡って行った。そうしたならば、驚くべき不思議なことが次から次へと起こってきた。

●時間を支配する神

そういう現実の神であるからこそ、過去を本当に生かす、また未来を本当にきたらせるという不思議なことができる。その現実は、今私が

「現実」

と言ったのは単なる時間の過去とか現在とか未来とかいう、そんな現実ではない。相対的現在の奥の世界というのが

「永遠の今」

です。「永遠」というものをとらえている。私たちはこの

「生ける神に、在りて在らしめる神に共にある」

ときに永遠をとらえている。

「永遠とはどういうものであろうか、えらく遠そうだなぁ」

と、そんなのではない。永遠は皆さんのじかじかのところに来ている。私たちは時間をつ

かまえるという。永遠という時間を捕える者は神をとらえることであり、神にとらえられた人が永遠という時間を持っている。この移り行く時の中に永遠というものを持つ、捕えるという秘訣は

「生ける神と一つになる」

ことです。時間をいくら瞑想しても考えてもどうにもならない。その点ではアウグスチヌスの『告白』第11巻の第13章の時間論は素晴らしいけれどもなお足りない。私たちの角度はきわめて実存的な角度から時間をつかまえていく。そして永遠をつかまえることによって、時間を支配していく。だから、過去に対しても未来に対しても支配的になり得る。それはもちろん神にあってですよ。

●動的幕屋

38 **彼はシナイ山にて語りし御使および我らの先祖たちと偕に荒野なる集会に在りて汝らに与えん為に生ける御言を授かりし人なり。**

面白いですね、「生ける御言」という。ことにこの生ける御言は観念の言葉ではない。

「我が言は霊なり、生命なり」（ヨハネ6・63）

と、キリストは言っておられます。どうしても今のクリスチャンはこれを受けとれないのでダメです。

「聖書は何を言っているのだろうか。甲の先生はこのように解釈するし、乙の先生はあのように解釈するし」

なんて。「解釈」が何ですか。「釈義」だなんていうものをあなた方は乗り越えてください。水を割らずに端的にこのキリストの言は直ちに言います。それを文字づらにこだわって、それをもったいぶっていることではない。

「わが言は霊なり、生命なり」

と。生命なるキリストから発している言が生命であり、霊なるキリストから発している言が霊なのです、生命であるのです。

39 **然るに我らの先祖たちは此の人に従うことを好まず、反って之を押退け、その心エジプトに還りて、**40 **アロンに言う「我らに先だち往くべき神々を造れ、我らをエジプトの地より導き出しし、かのモーセの如何になりしかを知らざればなり」**41 **その頃かれら犢を造り、その偶像に犠牲をささげて己が手の所作を喜べり。**42 **爰に神は彼らを離れ、その天の軍勢に事うるに任せ給えり。これは預言者たちの書に「イスラエルの家よ、なんじら荒野にて四十年の間、屠りし畜と犠牲とを我に献げしや。**43 **汝らは拝せんとして造れる像、すなわちモロクの幕屋と神ロンパの星とを舁きたり。われ汝らをバビロンの彼方に移さん」と録されたるが如し。**44 **我らの先祖たちは荒野にて証の幕屋を有てり、**

モーセに語り給いし者の、彼が見し式に循いて造れと命じ給いしままなり。
45 **我らの先祖たちは之を承け継ぎ、先祖たちの前より神の逐いいだし給いし異邦人の領地を収めし時、ヨシュアとともに携え来りてダビデの日に及べり。**46 **ダビデ神の前に恩恵を得て、ヤコブの神のために住処を設けんと求めたり。**47 **而して、その家を建てたるはソロモンなりき。**48 **されど至高者は手にて造れる所に住み給わず、即ち預言者の**49 **「主のたまわく、天は我が座位、地は我が足台なり。汝等わが為に如何なる家をか建てん、わが休息のところは何処なるぞ。**50 **わが手は凡て此等の物を造りしにあらずや」と云えるが如し。**

イスラエルはモーセを通し、「証の幕屋」を通して神さまと出っくわした。あるいは「出会いの幕屋」ともいいますが――「集会」という訳はちょっとおもしろくない――神さまはそこに降ってこられて、そして共に語られた。モーセに語られた。即ち、旅をして日々に私たちに語りかけ、私たちは神に祈る。モーセはいつも畳んではまたかついで行って、そして「証の幕屋」を張るといった具合に、常に動的な幕屋の姿において動いて行った。神は常に生活において動いて導いて行った神である。

「昼は雲の柱、夜は火の柱となって道を示した」

と書いてあるように、いかにも動的な神であって、至るところが幕屋、神殿、聖所である。それがある所に固定してしまった。それはもちろんパレスチナに入ってしまえば、神殿を造ることもある意味においては当然ですよ。しかし、神殿の中には幕屋が置かれています。聖所、至聖所というわけで、とにかくそれが静的に定着してしまった。そこに信仰の危険があるわけです。だから、そのお宮というものが、何かもったいぶったり、そして、神殿だけが神さまのいらっしゃる所だと思って、他は何かお留守みたいな感じになってしまった。まぁ普通のお宮宗教ではそういったものですね。お宮まいりをする。しかし、私たちの生活は、

「どこへ行っても、神そこにいましたもう」

というのが、これが宗教の本当の姿です。信仰生活の本当の相であります。荒野において導いてくださったところの神、この荒野のごとき世界において常に神が共にいて、天国を現じて行くというところに、神の国を展開して行く姿があり、旧新約を貫く本当の相があると思う。その意味において動的な幕屋の在り方、

「至る所これ神と共にある」

という在り方です。神殿でも、いわゆる教会でもない。それは建物はあったっていいですよ。問題はそこにおいてとらわれやすいある間違った角度から、もっと本質なところを表わしたいという願いから、私は「幕屋」という表現をしているのです。

●無の教会

しかし、ヨーロッパにもアメリカにも、「タバナクル」（Tabernacle）という教派があるそうですが、しかし私は教派としてのタバナクル（幕屋）と言っているのではない。「無教会」というのは歴史的事態に対するひとつのプロテストとして出てきた言葉でして、相変わらず教会、無教会はあります。だけれども、

「無教会主義は本ものである、教会は少し間違っている」

なんてな具合に、人を裁いてしまってはいけない。

だから、私は主義主張はきらいです。「無教会主義」はいやです。「無教会」でもいいけれども、もっと積極的に「無の教会」といいたい。「無という教会」といいたい。即ち、「われ」というものがなくて、キリストを生命としている「われ」ですから、「われは無なり」ということ。

「私は自ら何もできない」

という。その「無」においてこそ「キリストの無限」が来る。だから、私は無教会という言葉を使うのなら、「無の教会」という、「の」という字を入れたい。けれども、「無の教会」というとややこしいので、「幕屋」という言葉を使うわけです。それで、幕屋の本質は無の教会にある。皆さんも、ここに教会の方もいるし、また、いわゆる無教会の方もいるでしょうが、とにかく――何でもいいですよ――問題は、

「それぞれの相対的な在り方において本ものがあるかどうか」

にかかっている。

そういわけで、このステパノが言いたかったのは、

「神殿宗教や律法宗教ではない」

ということ。モーセが捕えられた動的な事態がどこまでも大事な伝統です。

「幕屋的な在り方が大事だ」

とステパノが言っているので、ステパノは私たちの幕屋の先駆者であると思う。幕屋の把握の先駆者として、幕屋的実存者として、神と共に歩んでいた。なにゆえ神と共に歩んで行かれたか。聖霊が内住していたから神と共に歩めた。聖霊が内住していなければ、「神と共に」と心で思い観念していても、実力とはならない。彼は聖霊に満たされた者で、

「ステパノは聖霊にて満ち」

という。生命が来ているからです。

●心の割礼

51 **項強（うなじこわ）くして心と耳とに割礼なき者よ、汝らは常に聖霊に逆う、その先祖たちの如く汝らも然り。**

いわゆる、洗礼・聖餐式的な割礼といったことを行い、律法というものを守っているよ

うに見えるけれども実は、これは心がかたくなで、

「項強（うなじこわ）くして心と耳とに割礼なき者よ」

と。「項強（うなじこわ）き」とは、

「イスラエルの民は項強（うなじこわ）き民である」

とは申命記にも書いてある。

「汝らは常に聖霊に逆う、その先祖たちの如く汝らも然り」

「言い逆らいの徴」といいますが、汝らは聖霊に逆らっている。彼は本当に聖霊に満たされていた。「自分の信仰」というのではない。自分の信仰というように信仰を私していない。

「キリストは素晴らしい。自分は当てにならない」

といって、自分を投げ出しているのが本当の信の世界です。

52**汝らの先祖たちは預言者のうちの誰をか迫害せざりし。**

お前たちもあのモーセにつぶやいたところの先祖と同じことだよと。またどの預言者が迫害を受けなかったか。あのホセヤ、ミカ、イザヤ、エレミヤ、皆しからざるはなし、と言っている。神の霊を受けとると

「エホバの霊われに臨めり」

という人になって、旧約時代から迫害されてきた。キリストも山上の垂訓で言われました（マタイ5・11～12）。

彼らは義人の来（きた）るを預（あらか）じめ告げし者を殺し、汝らは今この義人を売り、かつ殺す者となれり。53**なんじら、御使たちの伝えし律法（おきて）を受けて、尚（なお）これを守らざりき』**

この義人とは、キリストのことです。この最大の預言者イエスを、ただ一人の義人を、天上天下ただ一人の人キリストを十字架につけてしまった。義人とは単なる正義の人ということではない。義人とは神さまの聖意を身に体して行じていく人をいう。

「汝のみこころを成さしめ給え」

という。

「どうも分からないけれども、汝のみこころを成さしてください」

なんていうのは祈りにはならない。「汝のみこころを成さしめ給え」という、この最も激しい祈りをキリストは生涯をとおして成さしめられた。これが本当に聖霊の人です。ですから、ステパノは言った、

「とうとう、お前たちはモーセの本当の事態からずれてしまって、幕屋的在り方からずれてしまった。そして神殿枯渇宗教となり、逆に生命の人に、聖霊の事態に逆らっている」

●勝利の十字架

54 **人々これらの言を聞きて、心いかりに満ち切歯（はがみ）しつつステパノに向う。**
55 **ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、**56 **『視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る』**

ここは聖書の中でもなんともいえないところです。

「視よ、天開けて」

という、霊界の天が開かれた。

57 **ここに彼ら大声に叫びつつ、耳を掩（おお）い心を一つにして駆け寄り、**

ステパノは全能の神にまかせられている。

58 **ステパノを町より逐いいだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロという若者の足下に置けり。**

レビ記の24章にも書いてあるように、けがれたる者は町から外に出して殺す。キリストの十字架もそうです。エルサレムの城外に出す。罪人はみな外に出されました。町は穢（けが）されるからというわけです。

59 **かくて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』**60 **また跪（ひざま）づきて大声に『主よ、この罪を彼らの負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて眠に就（つ）けり。**

このステパノの二つの言葉は、キリストの十字架上の言がそのまま口にのぼってきた。主の第一の殉教者ステパノが全くキリストの霊によって動き、また、それを大胆に告白し、

「汝、わが十字架を負いてわれに従え」

というキリストの言を全く受けとって天界に凱旋した。彼らはステパノを石にて打ったから、こいつをやっつけたと思ったが、どっこいそうではない。ステパノは打たれつつ完全に勝ってしまった。

「視よ、われ天開けて人の子の神の右に立ち給うを見る」
「主よ、この罪を彼らに負わせ給うな」

というようなステパノの最後の、天使のごときその姿。これはそこにいたある人をうったに相違ない。誰あろう、それはサウロ、後のパウロです。

「サウロは彼の殺さるるを可（よし）とせり」

と、いよいよサウロは頑（かたく）なになって、己を義としているところの霊的なサタンに捕えられていく。パウロは自分を大いによしとしている。ステパノのこの驚くべき十字架の愛がパウロには見えない。この事態はキリストにぶつかって私たちが倒れるまでは、聖書は、

「目あれども見えず、耳あれども聞こえず」

です。これははっきり申し上げておきます。

ステパノはついに身をもって、この聖霊の事態を証し、彼自身が言い逆らいを受ける第一の徴となって、キリスト教の教会史を血をもって書いた。天国はこのような義人の血によって支えられている。本当のキリストの生命は、ステパノの血が流れても、ステパノの真理とその声とその生命は決して枯渇していかない。彼は肉体はどうなっても、彼の霊体はもう完全に魂とともに凱旋して行った。ステパノをしてかくなさしめたるところの原動力は、どこにあるのか。それはキリストの愛です。一切の現実を貫いてステパノはこれに勝った。これに勝つことのできるのは、私たちの信仰とか私たちの聖書知識とかでは勝てない。私たちの魂が本当に聖書の御言を化体せしめ、キリストの愛を本当に宿すという、この事態でなければこれは勝てない。このステパノは使徒たちよりも、最初に身をもってキリストの後に従って行った。

即ち、あの大使徒パウロは、ステパノがなかったならば考えられなかったと言っても過言ではなかった。キリストの前に洗礼者ヨハネが、そのような殉教的な死をとげて行きました。パウロの前にステパノが行った。天界において輝く星は、このように下積みとなったところの捨て石です。このステパノの殉教の姿、彼はこの一切のパリサイに対して真理を宣べ、またそのパリサイに対して全く無抵抗をもってこれに勝ち、自分が十字架されることによって、本当に勝って行った。

皆さん、この福音の世界はもの凄い素晴らしい世界ですから、水を割ってはダメですよ。私は皆さんを水を割らないクリスチャンにしたい。クリスチャンとは「キリスト者」、キリスト者とは

「油そそがれたる者」

という意味です。「油」とは聖霊の油です。この聖霊の油をそそがれたる者をクリスチャンという。一体、クリスチャンが何人、聖霊の油そそがれた者として自覚しているか。

私たちは大和魂、日本の武士の後裔です。あの赤穂義士のような素晴らしい義士を出した日本人ではないですか。あの義士の精神には誰だって打たれるでしょう。それならば本当に私たちの中に、聖霊において死を乗り越えているような義士、聖霊の義士という者が、このクリスチャンであるわけです。であるならば、なんと言い逆らいを受けても、神さまのその御霊の生命、光の中に来たならば、どんなに言い逆らいを受けても、これを包括してしまい、全部それを救い上げていくような、驚くべき荷う愛というものがその人たちの中にある。魂の世界は肉体を完全に支配していきます。

皆さん一人ひとりが、かけがえのない生涯ですよ。どうかこのキリストを無限に受けとってください。受けとることの深ければ深いほど、素晴らしくされていくのです。「これでいい」なんていうことは絶対にないから。しかも、常に満たされて進んで行くから、これはありがたいことです。どうか、聖書はこの角度から読んでください。そうしたら、聖書の文字が躍動してきます。